

# モデルとしての「空想美術館」

芸術家の模倣的実践(1950~60)

Le 'Musée Imaginaire' comme modèle.

Pratiques mimétiques d'artistes (1950-1960)

2024/4/8 (Mon) 14:00-15:30

東京大学駒場Iキャンパス 18号館4階コラボレーションルーム1

University of Tokyo, Komaba Campus I (Build. 18, 4F, Collaboration room 1)

講演者：マリア・スタヴリナキ Maria Stavriniaki (ローザンヌ大学)

司会：松井 裕美 (東京大学)



概要：アンドレ・マルローの『空想美術館』（1947）は、絶え間め変容のうちに恒久の現在を生み出し美術の歴史を破壊することを目的とした書物である。この講演では、1950年代から60年代の芸術家たちが、美学的・認識論的・政治的なレベルにおいて、マルローの反歴史モデルをいかに受容していたのかについて検討する。マルローの普遍主義的なフォーマリズムは、しばしばマルローの思想に矛盾するかたちで、さまざまに模倣されてきた。芸術家たちの手による執筆活動や展覧会、アーカイブ、映画、研究会は、「空想美術館」というモデルを具現化するメディアであり、装置でもあった。アド・ラインハートにとって、北半球の旅行中に撮った記念碑の写真を展示会場で投影することは、その抽象絵画とともに、美術史の終焉という考えを示すためのものであった。イギリスのインディペンデント・グループは、歴史から解放されたユートピア的な可能性を持つものとして写真図版を展示した。アスガー・ヨルンは南ヨーロッパ中心に書かれてきた歴史の中で抑圧されてきた、北欧の「空想美術館」を生み出そうとした。クリス・マルケルは、アラン・レネとともに制作した映画において、マルロー流のユートピア概念を、脱植民地化に役立てようとした。

講演者について：美術史における時間概念の相対性を問うことを通して、社会科学と政治思想の交差する視座から現代美術史に関する研究を行ってきた。前衛美術についての研究（特に美術批評家のカール・アインシュタイン）から、近代以降の先史時代の文化の発見についての研究へと関心が発展し、単著 *Saisis par la préhistoire. Enquête sur l'art et le temps des modernes* (Dijon, 2019, traduction en anglais chez Zone Books en 2022) を出版。また2019年にポンピドゥー・センター（パリ）で開催された「先史 近代の謎」展を共同監修。現在は1950年～70年代の芸術と歴史性、認識論の関係について研究しており、パリ市近代美術館における「原子力時代の芸術」展の開催を監修者として準備している（2024年10月～2025年2月）。



主催：国際共同研究強化 (B) 22KK0002 (代表：寺田寅彦) / 東京大学芸術創造連携研究機構

言語：フランス語 (逐語通訳あり) / Langue: Français

問い合わせ：松井裕美 (hiromimatsui[a]g.ecc.u-tokyo.ac.jp) / 〒153-0041 東京都目黒区駒場 3-8-1